

市場実験を活用した 経済学教育

草川孝夫

高知工科大学 経済・マネジメント学群

行動経済学会第9回大会

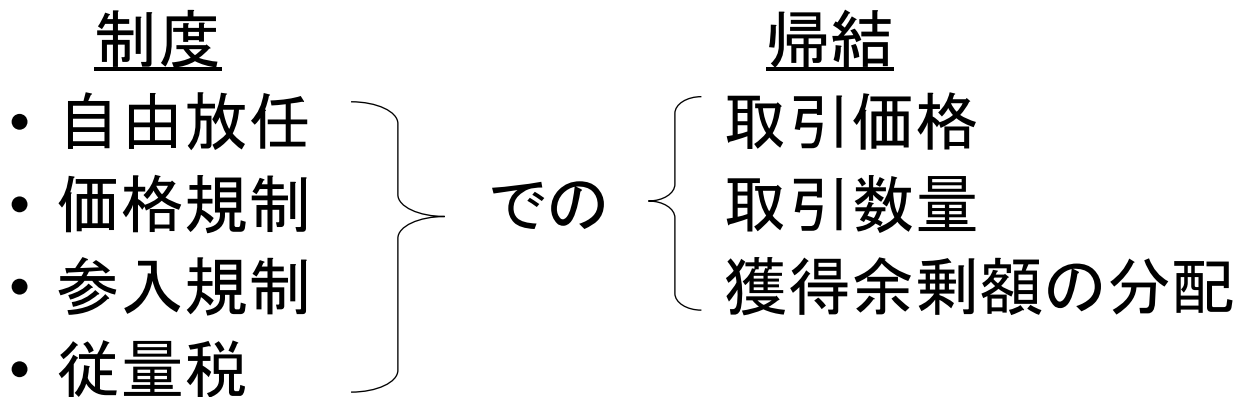
2015年11月29日

『経済政策I』の講義環境

- 科目情報：
 - 3, 4年生受講
 - 専門科目
 - 週1回90分 × 15回
- 受講者：
 - 経済専攻が80～150人, 法学・政治学専攻が10人弱
 - 経済専攻はミクロ・マクロ経済学受講済。数学苦手。
- 教室環境：
 - 最大300人程度入る大教室
 - プロジェクター・書画カメラあり

『経済政策I』の講義内容

- 内容は、ほぼ『公共経済学』
- 部分均衡分析の枠組で、次の各状況を分析：



実験の利用目的

- 『経済政策』は、カリキュラム上、とくに実験を使う必要のある科目ではない。
- 市場実験を、部分均衡分析を理解するためのツールとして利用。

実験の利用方法

- 第1回の講義で**実験**を実施
- 道具は紙と鉛筆。結果をスクリーンに投影。
- 獲得した余剰に応じて、成績に加点。
- 各制度について、
参加希望者 or 指名された人の各人に
MC(売手3人), WTP(買手3人)を書いたカードを渡し、
教室の前で自由に交渉・取引させる。
- 第2回以降の講義で、**実験で使った数値をもとに**、
部分均衡分析を説明。

実験を使ってよかったところ

- 学生は、日々の取引は経験しているが、そこから様々な点が捨象された「理想的な環境」での取引をしたことがない。



いきなり理論の設定を説明すると
現実とのギャップに戸惑う



実験を使ってよかったところ

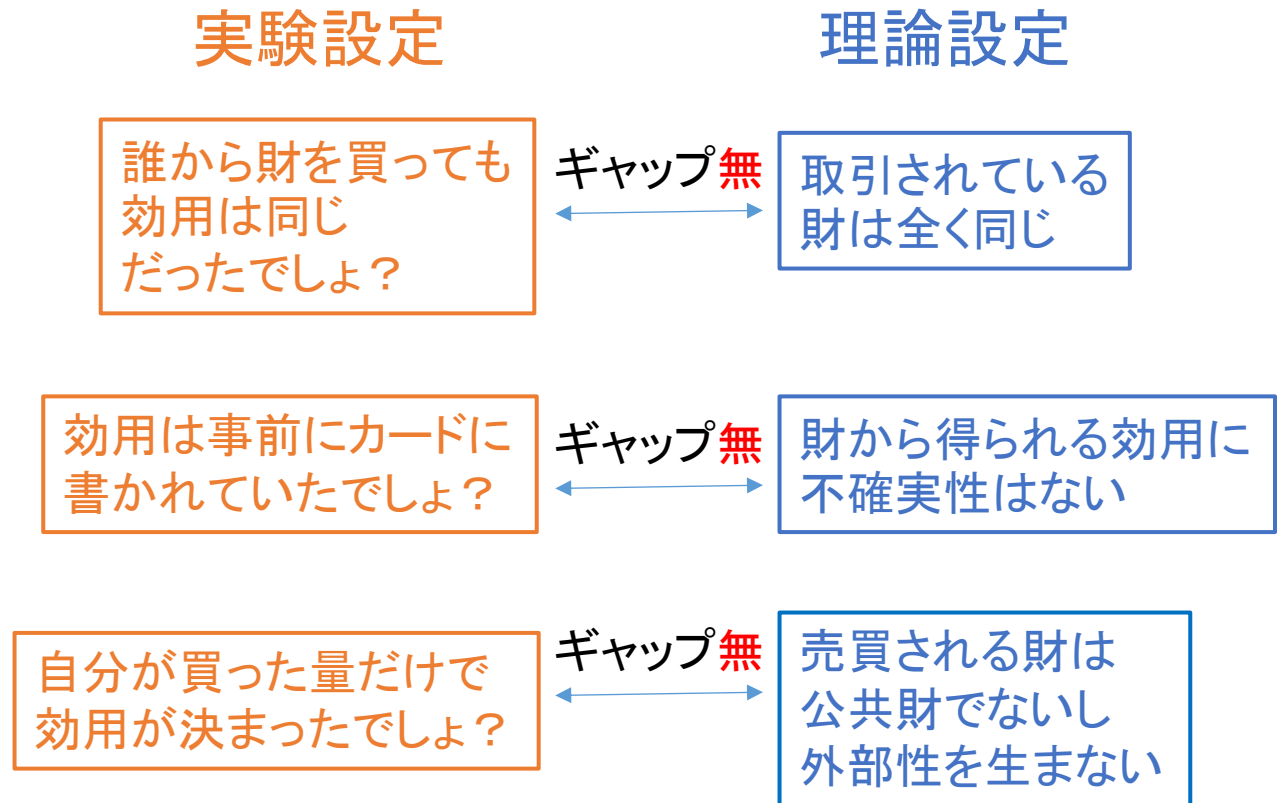
- 現実と理論のギャップを埋める道具として、**実験体験**を活用。



- このギャップに学生は違和感を感じてない様子。
 - 抽象化された「経済モデル」
(例) 人生ゲーム、モノポリー、桃太郎鉄道などのプレイヤーとして、行動した経験があるため？

実験を使ってよかったところ

- 理論設定の説明も、実験設定をもとに:



実験を使ってよかったところ

- 授業で示される理論的帰結も、
学生が実験で体験したことのあるものになる



「取引実験でも、
自由放任によって
総余剰を最大化できたでしょ？」

「実験を実施したときに、この理論も、均衡価格も、
他人の WTP, MC も知らなかったにも関わらず！」

実験導入でうまくいかないところ

- 後半になると、**実験設定**を忘れてしまうことも。
- **理論予測**から外れた**実験結果**
(損を生む取引。需給曲線の交点の右側の人の取引)
 - 対策：制度間の**相対的關係**は維持されるので、そこを強調

制度	価格	数量	総余剰
自由放任	¥100	10単位	¥1,000
	∧	∨	∨
$P \geq ¥140$	¥140	6単位	¥840以下